「生きた建物、教会」

エペソ人への手紙２：２０－２２

July.31.2022

エペソ人への手紙２：２０－２２（パワポ）

Preface

ここに来て、使徒パウロは、突然、私たちのことを建物だと表現します。

突然と言いましたが、何の前提もなく、私たちのことを建物だと言っているのではなく、ここに至るまでの話がありました。

主に１１節から始まる内容となりますが、どんなことがあっても全く相容れることのなかったイスラエル人と異邦人が、イエス・キリストにある救いによって何の区別もなく、同じように神の御前に出て行ける者となりました。

そして先週見ましたように、私たちは皆、同じ神の国の民であり、同じ神の家族であるという話の流れの中で、さらに私たちのことを建物だと、パウロ先生は言っています。

このエペソ書２：２０に至るまで、使徒パウロは、主に二つのことを語って参りました。

人間皆誰一人として違いはないという事と、その、人に対する神の愛は例えようもない程の大きな愛だということです。

神様の御前に出て来た者たちは、偏った愛、誰かを少なく愛し誰かを多く愛すような違いのある愛され方はされず、誰でも神様の御前に導き出されたならば、イエス・キリストの血によるという同じ恵みを受けた同じように愛されている者たちだということを、ここまでパウロは語ってきました。

私たちは、神様がご自分の子とした尊い存在です。

神のひとり子イエス・キリストの血というあってはならない代価を払ってまで、ご自分の子とした神様にとって尊い存在です。

そして、その尊い存在は、使徒たちや預言者たちを通して語られた神の言葉という土台と、イエス・キリストという要の石によって組み合わされていく聖なる建物だと言います。

Part One

あり得ないほどのクレイジーな神の愛。

私たちがどれほどに神様にとって尊い存在で、神様の愛がどれほどありえないほどクレイジーかと言いますと、もし罪人が私という人一人だけだったとしても、父なる神様は、おそらくイエス・キリストをこの世に送って下さったことでしょう。

全く同じように、私のすぐ隣に座っておられる方だけが罪人で、それ以外の人が罪人でなかったとしても、その方のためだけに父なる神様は、御子なるイエス

様をこの地上に送って下さったことでしょう。
　私という人と全く同じく、私の隣にいる人も、神様は愛しておられます。
　私を愛して下さる神様ばかりを私たち強調してしまいがちですが、私を愛して下さっているのと全く同じように、寸分の違いもなく、私の隣にいる人もクレイジーな程に愛しておられます。
　神様は、一人一人の私という人を諦めなさったり、放棄されたりはしません。
　もし神様が放棄されないのでしたら、誰をも何物をも、私という人、一人一人の私という人を奪い去っていくことの出来るものは存在しないでしょう。

　私もイエス・キリストの血によって神の子として下さり、私の隣にいる人もイエス・キリストの血によって、同じようにご自分の子になさいました。
　私も神様の御手によって掴まれ、隣にいる人も神様の御手によって同じように掴まれた人です。
　だから、「私たち二人は、同じように結び合わされ、組み合わされ、ともに築き上げられていく以外ない」と仰るんです。
　それを教会と呼びます。

　聖書が教会という言葉を使う時は、ただの場所や建物や組織のことではなく、神様の御手に掴まれた信徒一人一人を総称して言う時、教会と言います。
　柳長老が召された時にもお話ししましたが、まずは私という人それ自体が教会です。
　そして、キリストの血というあり得ない代価が払われるほどの私という教会一人一人が組み合わされて、結び合わされて、ともに築き上げられてこそ、また教会となります。
　一人一人が結び合わされることがなければ、それは教会とは呼べません。
　つまり、私という人がいないと教会でもないですし、私一人で教会やっているわけでもないということです。

　先程も言いましたように、私一人が罪人だったとしても、神様はイエス様をこの地上に送って下さったはずです。
　私たち一人一人のためだけにでも、父なる神様は、御子なるイエス様を十字架にお掛けなさったことでしょう。
　これは、私が作った作り話ではありません。
　イエス様ご自身が仰いました。
　９９匹の羊を野に残してでも、失った１匹の羊を探し出すまで諦めないと、イエス様が仰った通りです。

　なんやかんや言って、経済的利益が動機となっているこの世界にあって、９９匹の利益を放っておいて、１匹というわずかな利益のために出て行くという利益度外視の行動は、ちょっと理解不能でクレージーです。
　理解不能なほどに、私という人一人一人が、神様にとっては全てだということ

ですね。
　人間の親が自分の子のためならば何でもしてやるということには限界がありますが、神様は限界もなく、一人一人の私という人が神ご自身のすべてです。

　では、神様ご自身全てだと称される人の数は、何人ぐらいになるでしょうか？
　１４４，０００人です。
　１４４，０００という数は、ヨハネの黙示録にある天の御国にいる人数を表す象徴的な数字がですが、１２×１２×１０００が１４４，０００になります。
　始めの１２は旧約聖書の１２部族、その次の１２は新約聖書の１２弟子、そして１０００は無限、無数を意味する数字ですが、それを掛け合わせた旧約時代の信徒たち、私たちを含む新約時代の信徒たちという数えきれないほどの多くの一人一人が、自分たちが天の御国にいる理由を告白する時、何と告白するでしょうか？
　「神は、私のためにイエス・キリストを送って下さった」と告白するでしょう。
　つまり、一人一人の私という人が、主の懐に抱かれていて、十把一絡げにして神の懐に抱かれているという事ではありません。

　いっぱいいる中の居ても居なくてもよく分からない一人という私ではなく、私という一人一人が必ずいなくてはならない一人一人で、その私という一人が神にとって全てであるという究極の一人が集まっている集団が神の国であると同時に、神にとっては一人一人決して切り離すことの出来ない大きな一つでもあります。
　そして、この神の国の地上のモデルが教会です。
　建物の資材が分離していては、建物の役割を果たせないのと同じように、教会は、多くの人たちが集まる集団であると同時に、それ以上に大きな一つの単数であるというのが教会です。
　イエス・キリストの血によって贖い出され、神の御前に出て来た者たち、一人一人の私と私は、決して切り離すことの来ない大きな一つです。
　これを聖書は、教会と言います。
　私が居て教会、また隣の私という人がいて教会です。

Part Two

　神学生時代に、何の授業なのかはよく覚えていないのですが、こういう話を聞いたことがあります。
　ある牧師先生が教会開拓をして数年経った後、朝早くに１ヶ月間涙ながらに神様に祈ったそうです。
　どういう祈りかと言いますと、「神様、あの信徒一人のためにどんなに私が苦しんでいるかをご存知ですよね。どうかあの信徒を教会から追い出してください」と祈ったそうです。
　１ヶ月間何の応答もなかったのですが、１ヶ月たった頃、心に響く声がありました。こういう声です。

「あなたが出て行きなさい。」

深い神様の応答ですよね。
決して切り離すことの出来ない「私と私を切り離してください」という神様の心を知らないかのような牧師の祈りを１ヶ月間お聞きになって、切り離すことの出来ない大きな一つとされたものが教会であることを、神様はその牧師先生に教えなさったわけです。

人がイエス様を信じて、まず最も大きく変わるところが何かと言いますと、神様に対する態度ですが、その神に対する態度の変化が、どのような形で表れるかと言いますと、神を信じる者同士の関係が変わります。

これまでも何度も話してきましたが、最も重要な第一の戒めは、「主なる神を愛すること」、それと同じように重要な第二の戒めは、「隣人を自分自身のように、隣人を自分自身のように」です。
では、何で自分自身のようにとなるのか？
キリストを信じる者に変えられると、それまで離れていた複数だったものが、決して切り離すことの出来ない大きな単数・単体となるからです。
だから無理してそうするのではなく、自然と、「隣人を自分自身のように」となっていくわけです。
誰によって？　一つの御霊によってですね。

イエス様を信じる者に変えられると、私が私であるように、キリストを信じている隣の人も私になります。
キリストゆえに決して奪い去られることのない、結び合わされ、組み合わされた祝福の場にいるようになりますと、キリストにあって、“私とあの人”ではなく“私と私”になります。

１１節からパウロは、異邦人とイスラエル人という区別、敵意、壁が撤廃され、二つが一つとなって、同じ国民となり、神の家族となったという風に話を展開してきましたが、それでも現実問題やっぱりイスラエル人と異邦人とは一般的には違いますし、二つが一つとならないこと世の中いっぱいありますし、同じ国の民だと言ったところでそれぞれ違いますし、家族でさえも先週の話ではありませんが、てんでバラバラ心もバラバラ住んでいるところもバラバラでも、家族と言います。
しかし、建物に関しては、どんなに立派な資材材料を準備し並べたところで、それが組み合わされなければ建物とは呼べないですし、てんでバラバラでは、建物とは言えないですね。
だから、パウロは、もう一歩進んで、私たちを建物に例えるんです。
エペソ書１章で話してきた「教会はキリストのからだです」という御言葉にも繋がる内容です。

Part Three

建物は、一つ一つの資材によって成っていますが、その一つ一つの資材によって建物が建て上げられると、コンクリートだったり、木材だったり、鉄筋だったり、壁紙だったり、床材だったりの一つ一つの資材という概念はなくなり、一つの完成した建物という単体として目の前に現れます。

そして、それぞれの資材によって作られた柱だったり、基礎だったり、壁だったり、窓だったり、床だったりと、形を変えて建物を保つための役割をそれぞれが担うようになって、それぞれ大切な資材でしたが、建物とされたからにはもうそれ以上各々の資材という概念は自然と消えて、建物であることを誇れるようになります。

もちろん、建物になったからと言って、資材一つ一つの大切さが消えるわけではありませんが、資材が組み合わさってこそ、その真価を発揮するようになります。

例えば、窓が存在するためには窓枠とガラスが必要ですが、その窓枠とガラスが組み合わされて窓が出来上がると、窓枠もなくガラスもなく窓になります。

ガラスは窓枠がなければ何の意味をなさず、窓枠はガラスがなければ何の意味も成しませんが、二つが組み合わさると外気から内側の空間を守ってくれる立派な窓となります。

それなのに、ガラスがガラス単体の素晴らしさをどれだけ主張したところで、窓枠に頼らなければ何の意味も成すさなくなりますし、窓枠が窓枠単体の素晴らしさをどれだけ主張したところでガラスがなければ何の役にも立たなくなります。

それぞれ大切な一つの資材ですが、建物となった時に、その資材の真価が発揮されます。

先週まで話してきましたように、私たち人類、またはこの世界の根本的な問題は、それぞれがそれぞれ、良かれと思うことをしている分裂、葛藤、争いという一つであることを忘れ、また一つである時にその真価が表れるという事を失った世界であるということです。

そんな世界にあって、ただ一つの神にあって、唯一のキリストにあって、同じ一つの御霊によって、一つとされることの重要性と真実を使徒パウロは教えてくれています。

ですから、「クリスチャンはキリストを信じたら、はい終わり」ではありません。

イエス・キリストを信じたからには、キリストによって一つでありながら集団である教会に必ずや属さなければならないですね。

なぜならば、生きた建物として成長し、互いに一つであることの大切さを知るために築き上げられていかなければならないからです。

もう一度、今日の聖書箇所を見てみます。

エペソ人への手紙２：２０－２２（パワポ）

ただ建物と言いますと、命のない無機質な感じがしてしまいますが、パウロはここで、「生命感にあふれる建物だ」とキリスト者の群れを言い表します。
他の箇所でも聖書が建物と例える時には、必ず「命ある」ということを言及します。

例えば、礼拝堂を建築すると言った時、ただお金を集めて建物を建てるだけならば、そんなに難しいことではないでしょう。
礼拝堂を建て上げる時、何が難しいかと言いますと、その中に無数の人間ドラマがあり、その人間ドラマを通して、一人の一人の信徒たちが神様とのドラマを築いていけるようすること、関わる一人一人に霊的祝福がある事、これが礼拝堂という建てる意味でありますし、もしこれがなければ、礼拝堂という建物を建てたところで何の意味も成しません。
人に見せるための立派な建物を建てるだけならば、もしかしたらそんなに難しいことではないかもしれません。
でも、見せることよりも大事なのは、それを建て上げる一人一人の成長と人間模様に神様の恵みと愛が編み込まれていくことですね。

だからクリスチャンは、「イエス様信じて、はい終わり」と言って、一人で信仰生活を送ればいいわけではありません。
その信仰生活の中に、神様の恵みと愛が編み込まれるために、建物がそうであるように、必ずや同じくキリスト者とされた者たちとの関りが求められます。

ある意味、一人で信仰生活を送れば、摩擦がないですから楽かもしれません。
でも、そこには成長が伴いません。
また、神様にとってすべてである他のキリスト者との関りがないならば、自分に向けられた愛と全く同じように他者にも向けられている神の愛を知ることもなければ、共に建て上げて成長していくというやりがいも感じないでしょう。
さらには、信仰生活に表れる躍動溢れる命を感じることにも乏しくなることでしょう。
どんなに良い材料であっても、建物の一部とならない限り、立派だと評価されることもなければ、公になる事もありません。

一人でいれば口うるさいことも聞かず、頭の痛い話にも関わる必要もなく、忍耐する必要なんかもないかもしれませんが、成長がないですね。
パウロは、ローマ書で、「苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」と言いますが、キリスト者同士のつながりの中で、そういったものが生み出されてくるわけです。
エペソ書４章では、こうも言います。
エペソ人への手紙４：１２－１３（パワポ）

苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すということが、キリストの身丈にまで成長することであり、そのためには、教会という建物の一端を担う奉仕者として他のクリスチャンと関り、摩擦もあり、愛し合うということもあり、教え合うということもあり、たまには傷つけ合うということもありながら、成長していくキリストのからだという建物を建て上げていくんです。

Part Four

コリント人への手紙第一３：５－９（パワポ）

先程もいいましたが、建物と言いますとその機能面と無機質さが思い浮かんでしまうので、パウロはここで、神の建物と言う前に、神の畑とも言います。

ただの建物ではなく、命のある作物を生み出す畑が、キリストを要の石とした教会だというわけです。

教会は、命を生み出し育むところであり、生み出し育むためには、共に汗水流して、カンカン照りの地を耕し、水をやり、時にはケガすることもあれば、実りが実るのが信じられず途方に暮れることもあるような生々しい人間ドラマが繰り広げられ、神が成長させてくださることを実体験し、成長させてくださる神に出会う場でもあります。

もう一箇所見てみたいと思います。

ペテロの手紙第一２：４－５（パワポ）

石が生きているわけないのですが、確固たることと確実性を表すために石という固さをイメージさせる建物の資材を取り上げながら、私たち、尊い生ける石であられるキリストに捕えられ「生ける石」となったキリスト者一人一人によって、霊の家が建て上げられていき、その家で、神と人とをつなぐ役割を担う聖なる祭司として一人一人のキリスト者が神によって立てられていることを言及しています。

教会は、ただ集まって、何かそれぞれの役割を担う機能的な組織や利益を上げるための事業所、集団ではありません。

神が生きておられること、その神が人を愛して止まないこと、その愛がキリストを十字架に架けるというあり得ないほどの愛であること、そして、壊れてしまったすべての関係を今一度キリストによって一つとし、命を生み、命を育み、命が育つ霊なる家です。

そして、その霊なる家の一つ一つとされたことを何よりも喜ぶキリスト者の群れでありながら、一つとされた単体である小さな神の国であり、やがて完成する大きな神の国を待ち望みながら、苦難を忍耐もって品性に変える聖なる生きた建物です。

だから、教会の規模や財政や事業や力が、その教会の顔となってはいけないですね。
教会において最も大事なことは、教会に来たら変わった、変化が起こった、神様の前にもう一歩近づくようになった、神様のために生きたい献身したいという気持ちが起こった、この世の調子に自分を合わせることから少しでも引くようになったということがその人に起こっていくというようなことが大事なんです。
変えられている過程にある人が、大事なんです。

あたかも、建物を建て上げるために、丸太ん棒が削られ、切られ、美しく素晴らしい建物を担う立派な木材へと変えられていき、その建物の木材となれていることが何よりもうれしく、誇らしく思えるかのようにです。

だから、どの教団のどの教会に行っているのかなんていう質問は、何の意味も成しません。
大切なのは、その人が、どれほどにイエス様を信じている人に見えるのかどうかということです。
「聖人君子でありなさないとか、倫理道徳的に立派でありなさい」ということではありません。
「あなたイエス様信じているのに、その程度？」なんて言う裁くことも何の意味もありません。
教会となったその人に、どんな告白があるかどうかが大事なことです。

使徒の働き３：６（パワポ）

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

Conclusion

教会は、お金があるからと言って利益にもならず、損にもなりません。
「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

教会は、いつでも、どんな時でも、この言葉を持っていなければなりません。
これがないならば、教会ではありません。
集団としての教会でもなければ、私たち個人としての教会でもなくなってしまいます。
なのにともすると、私たち「イエス・キリストはないけれども、金銀はある」または、「イエス・キリストもないし、金銀も私にはない」としてしまいます。

クリスチャンである私たちには、もうこれ以上金銀はありません。

でも、私たちにはあるものがあります。
「ナザレのイエス・キリストの名」です。

何物とも替えることは出来ませんし、何ものをも私たちから奪い去ることの出来るものは存在しない、永遠に関するすべてのものが確証されている者たちが、私たちキリスト者ではありませんか？

その感激と約束ゆえの堂々たる姿が私たちにあって然るべきですし、それを享受し、喜び、思う存分お使いになって下さい。
「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」

これをこの世界で思う存分用いる特権を持っているのが私たちキリスト者であり、生きた建物として存在している教会です。
だから、ひとまず、何よりも教会に来てください。
教会に繋がり続けてください。

教会は、実に全くもって、神様の驚くばかりの私たちに対するご配慮の結果存在しています。
教会は、神様のご配慮そのものです。
私たちは、その教会そのものでありながら、また群れである教会を建て上げ、成長させる生ける石でもあります。
教会であることの祝福が、皆さんにあることをお祈りいたします。
お祈りいたします。

祝祷：使徒の働き３：６